令和８年度　第３回　魅力ある市立高等学校づくり懇談会

日時　令和 8 年 10 月 13 日（火）10：00～

場所　名古屋市役所本庁舎　正庁

１　開会

２　出席者紹介

３　教育委員会挨拶

４　懇談

・第２回懇談会意見まとめ

・懇談会意見のまとめ

５　その他

６　閉会

魅力ある市立高等学校づくり懇談会 委員名簿

氏名 （敬称略）	所属
久野　弘幸	中京大学教養教育研究院　教授
柴田　好章	名古屋大学大学院教育発達科学研究科　教授
伊藤　恭彦	名古屋市立大学　理事・副学長
加納　澄江	愛知県教育委員会　教育部長
平井　由紀子	株式会社セルフウイング　代表取締役社長 博士（早期起業家教育） （文部科学省　アントレプレナーシップ推進大使）
九鬼　綾子	ミックインターナショナル株式会社　代表取締役 （中部経済同友会 教育を考え行動する委員会 委員長）
青木　総平	名古屋市立小中学校ＰＴＡ協議会　会長
林　深雪	名古屋市立高等学校ＰＴＡ協議会　会長
加賀　幸一	名古屋市立東桜小学校　校長
久木田　隆宏	名古屋市立菊里高等学校　校長
森　義裕	名古屋市立植田北小学校　教諭
加藤　司	名古屋市立工芸高等学校　教諭

魅力ある市立高等学校づくり懇談会

第３回

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

市立高校の役割とビジョン

・**どのような社会の変化も前向きに受け止め**、自分で次をつくる力、問題解決する力、仲間と協働する力を育成できるとよい

・現場感覚としては、**「多様な生徒を包摂する」ことが喫緊の課題**

・**日本語指導が必要な児童生徒**が増えている一方で、支援体制が十分ではない

・**大人と子どもとの目線のギャップ**がある。**子どもたちが魅力に感じること**も大切な視点

・「**名古屋の産業・文化を支える人材育成拠点**」は他地域と異なる名古屋の教育として強く打ち出せる

・グローバル、ロボティクス、アントレプレナーシップ、マーケティングなどの**人材育成を誰が担うのか**が大きな課題。多忙な教員に追加的に求めるのではなく、**オンラインや外部人材の活用を含めた仕組みづくり**が必要

・多様性は単なる受け皿ではなく、**違いを価値創造につなげる視点**は重要

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

普通科改革

・普通科は各校で共通する科目が多く、特色を打ち出しにくい現状がある一方、今後の学習指導要領改訂による単位や科目履修の柔軟化を生かし、**各校の目指す姿に応じた特色あるカリキュラムづくり**が期待される

・普通科は、**将来の進路や得意分野が定まっていない生徒にとって、多くの選択肢を残せる**意義がある

・市内は交通網が整っており、**各校の特色化は通学可能な範囲で多様な選択肢を増やすことにつながる**。

・学校の特色化を進めるにあたっては、多様な進路につながる**基本的な学びの土台も必要**である。

・**単位制**は自らの興味・関心や得意分野に応じて学びを選択できる魅力的な仕組みである。

・名古屋市には多様な人々や専門家が集積していることから、**実社会の人々との交流を通じて地域や社会の課題について探究する学び**は、名古屋市ならではの特色となり得る。

・普通科においても**多様な体験活動**を充実させることが重要

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

専門学科改革

・就職だけを前提とするのではなく、**大学や高専への進学を含め、多様な進路選択肢**を保障することが重要

・アントレプレナーシップ教育や探究活動、インターンシップなどを充実させ、**企業や地域との連携を通じて社会との接点や人間力を育む機会を広げるべき**

・専門学科の将来像を考える上で、**大学との連携**は重要

・工業や工芸などの学びは、企業や専門家だけでなく、**地域住民や消費者との関わり**を通して学びが深まる

・工業学科では、先端技術等により**地場産業を革新できる人材**育成を目指すべき

・学校と企業・社会をつなぐ外部コーディネーターやキャリア支援人材の役割が重要であり、**外部人材を活用しやすい仕組みづくり**が求められる

・**教員同士が専門性を生かし合い**、学科横断的な学びを進めることも重要

・**音楽科やファッション文化科も市立高校の貴重な財産**。音楽科は定員割れしているが、志願者数や効率だけで判断するのではなく、**時代に合わせたリニューアルや柔軟なカリキュラム**を考えるべき

・中学生や保護者が持つ**専門学科のイメージと実際の教育内容にはギャップ**があり、学びの実態や進路の多様性など、特色や魅力を**より積極的に発信する必要**がある

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

総合学科改革

・総合学科は、地域の子ども、高齢者、生活者と関わりながら、**生徒が自分の将来像を徐々に定めていく学校**として位置付けられる。地域連携や協働の中で、**専門性と学校教育としての教育性を組み合わせていく発想**も重要

・西陵高校の地域連携の取組は地域からも良いイメージを持たれており、大きく方向転換するのではなく、**地域との協働をさらに発展させる方向**が望ましい。

定時制改革

・定時制は、**「多様な生徒を包摂する」という観点から極めて重要**な存在であり、不登校傾向などにより毎日学校へ通うことが難しい生徒にとって、重要な学びの場となっている。

・**三部制**への移行は、**生徒の選択肢を広げ、より学びやすい環境づくりに有効**である。

・愛知県で導入されている**フレキシブルハイスクールのような柔軟な仕組み**も参考にしながら、市立学校としてどのような対応ができるか検討する必要がある。

・定時制は、通学が困難な生徒だけでなく、スポーツ、起業、研究など**学校外で活躍する生徒の学びを支える場**としても位置付けられる。

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

学びを支えるしくみ

・**学びを途絶えさせないという観点**は、公立高校として非常に重要。

・**全日制入学後**に状況が変わった生徒にも、**学びを途絶えさせず卒業までつなぐ道筋**を用意することが重要

・**様々な背景を持つ子どもの進路先**として、公立の**通信制**は意義がある。

・通信制は、通学困難な生徒だけでなく、**学校外でも活躍する生徒の学びを支える環境**としても位置付けられる

・学校数の多い名古屋市では、１校に多機能を持たせるだけでなく、**学校同士が連携し、他校や通信制で取得した単位も活用しながら卒業できる仕組み**が考えられる

・名古屋市の規模では、科学や数学など**特定分野に突出した才能を持つ子ども**が潜在的に一定数いると考えられ、多様な学びの中で視野に入れる必要がある

第２回懇談会　意見まとめ　主な意見

学びを支えるしくみ（中高一貫教育）

・中高一貫校は**多様な学びの選択肢の一つ**だが、**受験の低年齢化は大きな課題**であり、市立高校として設置する必要性や学校像は慎重に検討すべきである。

・**不登校傾向の生徒や日本語指導が必要な生徒**にとって、受験の障壁を下げながら**学びを継続する仕組み**として検討の余地がある。

・中高一貫校は、６年間という長期で子どもを見てもらえる点で保護者にとって魅力的だが、理念や枠組みが明確でないと、学力重視・受験競争型の学校というイメージになりやすいため、**明確な理念設計が必要**

・大切なのは入口だけでなく、**入った後にどのような学びを提供するか**である。

・中高一貫校については、**ゆとりをもって学べる学校**、**子どもの成長に寄り添う学校**が望ましい。

・新設の是非だけにとらわれず、幼小中高で**「学びのコンパス」**を共有し、**自ら学びをデザインする力**を伸ばすことは**既存の枠組みでも進められる**

魅力ある市立高等学校づくり懇談会
意見のまとめ（案）

令和８年１０月

魅力ある市立高等学校づくり懇談会

目　次

１　懇談会の設置について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
２　市立高校の現状・特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
３　市立高校が目指すもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
４　市立高校改革のビジョン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
５　各学科の方向性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
　（１）普通科
　（２）専門学科
　（３）総合学科
　（４）定時制
６　学びを支えるしくみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
７　持続・発展のための体制づくり・・・・・・・・・・・・・・・２０

参考

魅力ある市立高等学校づくり懇談会委員名簿
魅力ある市立高等学校づくり懇談会開催実績

1　懇談会の設置について

少子化の進行による生徒数の減少や、生産年齢人口の減少に伴う就業構造の変化、デジタル化の急速な進展、多様な学びへのニーズの高まりなど、高校教育を取り巻く環境は大きく変化している。将来の予測が困難な時代において、生徒一人ひとりの個性や能力を伸ばし、社会の変化に主体的に対応できる資質・能力を育成するため、高校教育にはこれまで以上の改革が求められている。

また、国においては、「令和の日本型教育」をはじめとして、高等学校の特色化・魅力化や社会的役割の再定義、探究的・文理横断的な学びの推進、多様な学習ニーズへの対応など、高校教育改革が進められている。2040 年を見据え示された「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）」では、AI 時代に求められる能力の育成や地域・社会の発展を支える人材の育成、教育機会の確保などの改革の方向性が示されており、高等学校には新たな役割が期待されている。

こうした社会情勢や国の動向を踏まえると、名古屋市立高等学校においても、これからの社会に求められる役割や教育の姿を改めて検討する必要がある。本懇談会は、市立高校のあり方について多角的な視点から議論を行い、令和８年度中の策定を予定している「魅力ある市立高等学校づくり推進基本計画」第３次計画の検討の参考とすることを目的として設置されたものである。

2 市立高校の現状・特色

（１）市立高校の概要

名古屋市立高校は 14 校 16 課程で、政令指定都市では最大の学校数を擁している。普通科、専門学科、総合学科等、様々な学科・課程を設置し、各学校で特色のある教育を実施している。

		学校名	学科	募集定員（令和８年度）
全日制	普通科＋専門学科	菊里	普通科 音楽科	320 40
		向陽	普通科 国際科学科	320 40
		桜台	普通科 ファッション文化科	320 40
		名東	普通科 国際英語科	320 40
	普通科	北	普通科	280
		緑	普通科	320
		富田	普通科	280
		山田	普通科	320
	専門学科等	名古屋商業	商業科（ｵﾌｨｽﾋﾞｼﾞﾈｽ、ITﾋﾞｼﾞﾈｽ、ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾋﾞｼﾞﾈｽ）	280
		若宮商業	商業科（未来ﾋﾞｼﾞﾈｽ）	160
		工芸	工業科（電子機械、情報、建築ｼｽﾃﾑ、都市ｼｽﾃﾑ、ｲﾝﾃﾘｱ、ﾃﾞｻﾞｲﾝ、ｸﾞﾗﾌｨｯｸｱｰﾂ）	280
		工業	工業科	240
		西陵	総合学科	240
定時制		工業	工業科（工業技術）　【夜間】	40
		中央	普通科　【昼間】 普通科　【夜間】 商業科　【夜間】	160 80 40

（２）これまでの取り組み

☑ 計画上の位置づけ

社会のニーズや多様な生徒の学びに対応した魅力ある高等学校づくりを進めるため、「魅力ある市立高等学校づくり推進基本計画」を策定するとともに、「第４期名古屋市教育振興基本計画（コンパスぷらん）」においても学びのあり方改革を重要課題に位置付け、様々な取り組みを推進している。

魅力ある市立高等学校づくり推進基本計画

第１次計画（H25～）	第２次計画（H30～）
【主な取り組み】 ➤学科、コース新設 国際科学科(向陽)、国際理解コース(北) ➤専門学科の充実 デュアルシステム、ドイツ派遣 等	【主な取り組み】 ➤学びのあり方改革（パイロット校設置） ➤若宮商業高校に高等特別支援学校を併設 ➤グローバル・エデュケーション・センター開設

第４期名古屋市教育振興基本計画（コンパスぷらん）R6～R10

「市立高等学校における学びのあり方改革」を推進

➤学びの変革と深化	➤専門学科の充実	➤学校の枠を越えた学び
探究的な学び･STEAM 教育･理数教育の推進など	企業連携・地域連携の促進など	学校間連携による単位修得など

☑ 特色ある取り組み

市立学校では、「子ども中心の学び」を掲げる「ナゴヤ学びのコンパス」のもと、生徒が主体的に学ぶ力を育む教育を推進している。また、ナゴヤ・スクール・イノベーション事業を通して授業改善を進めるとともに、各校において探究的な学びや特色ある教育活動を展開している。

また、名古屋市立大学との高大連携や企業と連携したデュアルシステム、キャリアナビゲーターの配置、インターンシップの実施などにより、生徒一人一人の進路実現や社会的自立を支援している。

さらに、生徒の海外派遣等による国際理解教育、オープン夏季講座や学校間連携による学びの充実、ＤＸハイスクール事業を活用した学習環境整備など、多様な教育活動を展開している。

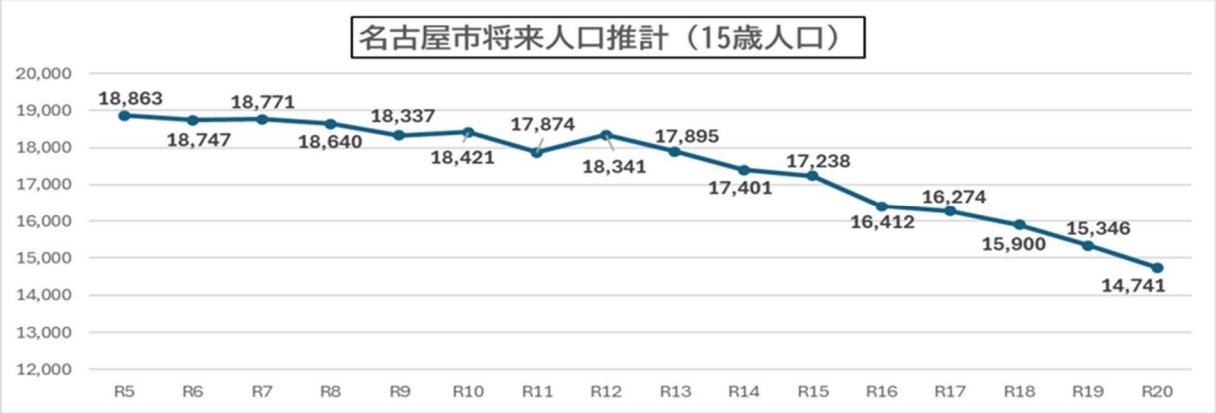
懇談会における委員の発言内容（抜粋）

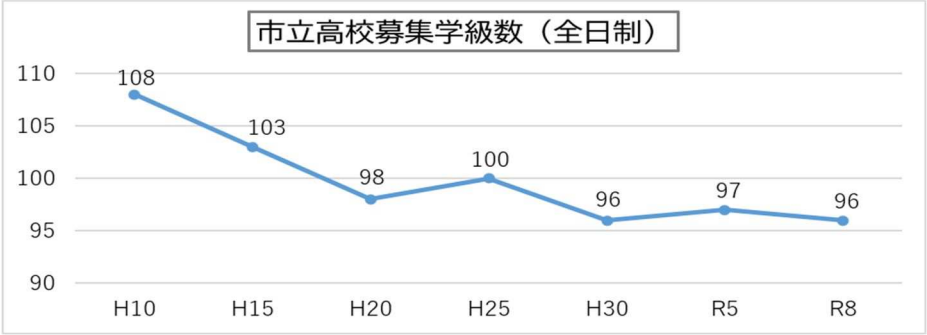
➤自由闊達な気風や教員・生徒の距離の近さが市立高校の魅力。
➤教員が主体的に研究・実践を行う文化、教員間・学校間のネットワークが強みとなっている。
➤幼児教育から高校教育までを一貫してつなぐ「ナゴヤ学びのコンパス」の理念が特徴・強みであり、今後も基盤とすべきである。

（3）現状・課題

☑ 少子化の影響

全国的な少子化の進行により、中学校卒業者数は 2030 年代後半に向けて、一段と減少する傾向が見られ、全国の 15 歳人口の推移を見ると、令和 20 年の人口は令和 5 年と比較して約 3 割減少する見込みとなっている。名古屋市でも、15 歳人口は令和 5 年の約 18,900 人から令和 20 年には約 14,700 人へと約 2 割減少すると予測されている。市立高校においても、学校規模の適正化も含めた持続可能な体制づくりを検討していく必要がある。





☑ 多様な学習ニーズへの対応

社会状況の変化に加え、生徒の学習ニーズや進路希望、生活背景の多様化が進んでおり、高等学校には従来以上に多様な学びを提供することが求められている。国においても、生徒一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保を高校教育改革の重要な方向性として掲げている。

全国的にも、高校教育の多様化が進展しており、通信制課程を置く高等学校や単位制高等学校、総合学科高校など、生徒の興味・関心や学習状況、進路希望に応じて学ぶことのできる学校形態が拡大しているほか、遠隔授業等を活用した柔軟な学びの環境整備も進められている。

また、高等学校進学率は 97%を超え、ほぼ全ての若者が学ぶ教育機関となる中で、不登校経験のある生徒や特別な支援を必要とする生徒、日本語指導を必要とする生徒など、多様な背景を持つ生徒への対応が一層重要となっている。

このような状況を踏まえ、名古屋市においても、生徒一人一人の多様な学びや進路の実現を支えるとともに、社会の変化に対応した魅力と特色ある高等学校づくりを推進していく必要がある。

☑ 授業料実質無償化の影響

高校授業料の実質無償化により、公立・私立間の経済的負担の差が縮小し、生徒・保護者はこれまで以上に教育内容や学校の特色を重視して進路を選択する傾向が高まっている。市立高校が今後も選ばれ続ける魅力ある高校であるためには、各校の特色や強みを明確にするとともに、時代や生徒のニーズに応じた教育の充実を図る必要がある。

3　市立高校が目指すもの

（１）市立高校の役割

社会の急速な変化や少子化の進行、生徒の進路選択の多様化が進む中で、市立高校には、高校教育の機会を確保するとともに、一人ひとりの多様な学びや進路の希望に応えることが求められている。

また、名古屋市は、産業、大学、文化、国際交流など多様な資源が集積する都市であり、市立高校にはこうした地域資源を生かした特色ある教育を展開することが期待される。地域や大学、企業等との連携を通して、生徒が社会とのつながりを実感しながら学ぶ機会を充実させ、地域社会や産業を支えるとともに、都市の発展を支える人材を育成していくことが重要である。

さらに、市立高校がこれまで培ってきた主体性を重視する学校文化や、教員・生徒の近い関係性、学校間の連携などの強みを生かしながら、多様な学びのスタイルを提供し、生徒一人ひとりの可能性を伸ばす教育を推進していく必要がある。

このため、今後、市立高校には、「名古屋市の発展を支える人材育成の基盤としての役割」と、「生徒の多様な進路や学習ニーズに応える役割」を担いながら、魅力ある高校づくりを進めることが期待される。

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

- ➤名古屋市の特徴として、産業の集積地、大学の多さ、市内での移動しやすさ、多様な活躍者がいることなどの「都市性」があげられ、市立高校の特徴にもつながる。
- ➤名古屋は国際都市であり、ものづくり産業や起業を支える人材育成が重要。
- ➤地域の産業を支えイノベーションを起こせる人材の育成が名古屋ならではの特色につながる。
- ➤名古屋市が重点的に行っている施策に貢献できる人材育成を考えるべき。
- ➤名古屋の地域を離れても再び戻ってきたり、名古屋に関わり続けたりする「関係人口」を増やす視点が重要。
- ➤子どもたちの進学ニーズに応え、教育水準を向上させる役割が必要。
- ➤学力、経済状況、国籍、進路志向など、多様な背景に対応する必要があり、多様な生徒を包摂することは公立高校として重要な役割である。

（２）目指す教育の姿

変化が激しく将来の予測が困難な社会では、知識や技能を身に付けるだけでなく、自ら課題を発見し、多様な他者と協働しながら解決策を探究し、新たな価値を創造していく力が求められる。また、地域や社会とのつながりを大切にしながら、自らの人生と社会の未来を主体的に切り拓いていく姿勢が重要となる。

市立高校ではこれまでも、「ナゴヤ学びのコンパス」の理念のもと、生徒の主体的な学びや探究的な学び、多様な他者との対話と協働を大切にした教育を推進してきた。また、教員同士の連携や学校間のネットワークを生かしながら、生徒一人ひとりの可能性を伸ばす学びの実践を積み重ねてきており、これは市立高校の大きな強みとなっている。

今後は、こうした市立高校が培ってきた教育の理念や実践を継承しながら、さらに発展させ、地域や企業、大学等との連携による探究的な学びや、多様な学びの機会の充実を図ることで、これからの社会の担い手として必要となる資質・能力の育成につなげていくことが必要である。

市立高校で育成すべき資質・能力としては、次のような視点が考えられる。

〇自らの学びと進路を主体的に探究し切り拓く力
〇多様な他者とともに学び、協働して課題を解決する力
〇未来を創造し、イノベーションを起こせる力
〇地域・社会とのつながりを大切にし、貢献する力

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤名古屋が目指す将来の都市像や産業構造を踏まえたプログラム整備や地域産業界の連携が重要。
➤名古屋市の教育の特徴・強みである「ナゴヤ学びのコンパス」の理念を基本としながら、特色のある教育を展開していくとよい。
➤多様な学びのスタイルの中で良き学び手を育成することが重要。
➤学校外のつながりからの学びを充実させるため、地域資源を活用した教育活動が重要
➤どのような社会の変化も前向きに受け止め、自分で次をつくる力、問題解決する力、仲間と協働する力の育成を目指すとよい。
➤大人と子どもとの目線のギャップがある。子どもたちが魅力に感じることも大切な視点。

市立高校の役割

生徒の多様な進路や学習ニーズに応える

〇多様な学びのスタイルの提供

〇教育の質・機会の確保

名古屋市の発展を支える人材育成の基盤

〇都市の発展、市の重要施策の実現

〇名古屋で活躍する人材、名古屋に関わり続ける人材の育成

生徒育成の基本理念

ナゴヤ学びのコンパス

〇自分に合ったペースや方法で学ぶ

〇多様な人と学び合う

〇夢中で探究する

育成したい資質

〇自らの学びと進路を主体的に探究し切り開く力

〇多様な他者とともに学び、協働して課題を解決する力

〇未来を創造し、イノベーションを起こせる力

〇地域・社会とのつながりを大切にし、貢献する力

4　市立高校改革のビジョン

これからの市立高校の役割や目指す教育の姿を踏まえ、改革を進めていくためのビジョンを次のように整理した。

Vision1　都市の発展を実現する「戦略的な教育拠点」

➤都市の発展（国際化・デジタル化・先端技術など）の基盤となる教育
➤名古屋を拠点に世界へ飛躍する人材の育成

Vision2　名古屋の産業・文化を支える「人材育成拠点」

➤地域経済・産業と教育の接続
➤市だからできる地域密着型の連携
➤社会と直結する実践的・探究的な学び

Vision3　多様な生徒を包摂する「都市型教育の中核」

➤学力、経済状況、国籍、進路志向など、多様な背景への対応
➤単なる受け皿ではなく、多様性を価値に変える教育拠点

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤現場感覚としては、「多様な生徒を包摂する」ことが喫緊の課題である。
➤「名古屋の産業・文化を支える人材育成拠点」は他地域と異なる名古屋の教育として強く打ち出せる。
➤グローバル、ロボティクス、アントレプレナーシップ、マーケティングなどの人材育成を誰が担うのかが大きな課題。多忙な教員に追加的に求めるのではなく、オンラインや外部人材の活用を含めた仕組みづくりが必要。
➤日本語指導が必要な児童生徒が増えている一方で、支援体制が十分ではない。定時制で多く受け入れられているが、今後は全日制にも広がる可能性があり、その子どもたちを育てられる土壌をつくることが、名古屋市の発展にも関わる。
➤多様性は単なる受け皿ではなく、違いを価値創造につなげる視点が重要。

5 各学科の方向性

（１）普通科

☑ 現状・課題

日本の高等学校教育において普通科は中心的な役割を担っており、高校生の約７割が普通科に在籍している。名古屋市においても、市立高校全日制生徒の約 65％が普通科に在籍しており、市立高校における教育でも大きな役割を担っている。

市立高校では、第２次魅力ある市立高等学校づくり推進基本計画の中で、パイロット校を設置して、普通科高校を中心に学びのあり方の改革を推進してきた。グループワークを効果的に用いた授業の実施等を通じて、主体的・対話的で深い学びを基本とした授業の展開など、学びの充実に向けて一定の成果を上げたと考えている。

その一方で、従来の普通科教育については、大学進学を前提とした教育に偏りやすく、学校ごとの特色が見えにくいことや、地域・社会とのつながりが十分ではないことなどが課題と考えられ、社会の急速な変化や生徒の多様化が進む状況の中で、生徒の多様な興味・関心や地域社会の課題と結び付いた学びへと転換することが求められている。

普通科の課題

- ●教育内容が画一的で特色が見えにくく、生徒の多様な興味・進路に対応しきれていない。
- ●専門学科等と比べ、将来の職業や地域との接点が少なくなる傾向にあり、学校での学びと社会との関係や学ぶ意義を実感しにくい。
- ●文系・理系の早期分離による学びの固定化。

☑ 改革の方向性

国においても、履修の弾力化や教科横断型の新しい教科設定など、カリキュラム柔軟化の議論が進められており、今後は、普通科においても、多様な経験をしながら自分自身に向き合う時間を持たせることが重要となる。多様な進路につながる基本的な学びを保障するという普通科の利点も確保しながら、生徒の多様なニーズに応え、個に応じた学びを実現できるよう、各学校の特色化や役割の明確化を進めることが望ましい。

想定される取り組み

〇単位制の導入
〇新たな学科への改編、コースの設定
〇探究的な学びの拡充

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤普通科は各校で共通する科目が多く、特色を打ち出しにくい現状がある一方、今後の学習指導要領改訂による単位や科目履修の柔軟化を生かし、各校の目指す姿に応じた特色あるカリキュラムづくりが期待される。
➤普通科は、将来の進路や得意分野が定まっていない生徒にとって、多くの選択肢を残せる意義がある。
➤市内は交通網が整っており、各校の特色化は通学可能な範囲で多様な選択肢を増やすことにつながる。
➤学校の特色化を進めるにあたっては、多様な進路につながる基本的な学びの土台も必要である。
➤単位制は自らの興味・関心や得意分野に応じて学びを選択できる魅力的な仕組みである。
➤名古屋市には多様な人々や専門家が集積していることから、実社会の人々との交流を通じて地域や社会の課題について探究する学びは、名古屋市ならではの特色となり得る。
➤普通科においても多様な体験活動を充実させることが重要。

（２）専門学科

☑ 現状・課題

専門高校では、従来から専門的な知識や技能の習得、資格取得、実習や課題研究を通じた実践的な学びにより、地域産業を支える担い手の育成や職業人教育の推進において重要な役割を果たしてきたが、社会や産業構造の変化に伴い、その役割も変化している。特に近年は、専門高校卒業後の進路が多様化しており、就職だけでなく大学や専門学校への進学も増加している。そのため、専門的な技術・技能だけでなく、課題発見・解決能力、コミュニケーション能力、データ活用能力など、将来の進路選択やキャリア形成を支える資質・能力の育成が重要になっている。

市立高校の専門学科には、地域産業を支える実践的人材の育成に加え、社会の変化、新たな社会課題に対応できる人材育成が求められている。

専門学科の課題

- ●技術革新が進む中、従来型の専門教育だけでは将来の産業ニーズに十分対応できない可能性があり、専門教育の高度化と時代への適応が必要。
- ●実社会との接点を持ちながら学ぶ機会を増やすための地域・大学・企業等との連携強化
- ●中学生や保護者への魅力発信

☑ 改革の方向性

専門教育の強みである実践的な学びを基盤としながら、産学官連携の一層の強化や探究的な学びの充実により、実社会との接点を広げ、専門性と創造性をあわせて育んでいくことが重要である。市立高校の専門学科においては、単なる職業教育機関ではなく、多様な進路選択肢を保障し、未来を創る産業人材、地域社会の担い手を育成する高校へと発展していくことを期待する。

想定される取り組み

- ○高大連携の強化、企業等とのパートナーシップの強化
- ○現代的ニーズに基づく学科への再構築
- ○アントレプレナーシップ教育や探究活動、インターンシップなどの充実

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤専門学科は就職だけを前提とするのではなく、大学や高専への進学を含め、多様な進路選択肢を保障することが重要。

➤アントレプレナーシップ教育や探究活動、インターンシップなどを充実させ、企業や地域との連携を通じて社会との接点や人間力を育む機会を広げるべきである。

➤専門学科の将来像を考える上で、大学との連携は重要である。

➤工業や工芸などの学びは、企業や専門家だけでなく、地域住民や消費者との関わりを通してさらに深まる可能性がある。

➤工業学科では、先端技術等により地場産業を革新できる人材育成を目指すべきである。

➤学校と企業・社会をつなぐ外部コーディネーターやキャリア支援人材の役割が重要であり、外部人材を活用しやすい仕組みづくりが求められる。

➤教員同士が専門性を生かし合い、学科横断的な学びを進めることも重要。

➤商業・工業だけでなく、音楽科やファッション文化科も市立高校の貴重な財産。音楽科は定員割れしているが、志願者数や効率だけで判断するのではなく、時代に合わせたリニューアルや柔軟なカリキュラムを考えるべき。

➤中学生や保護者が持つ専門学科のイメージと実際の教育内容にはギャップがあり、学びの実態や進路の多様性など、特色や魅力をより積極的に発信する必要がある。

（３）総合学科

☑ 現状・課題

総合学科は、多様な選択科目の中から生徒自身が履修科目を選択し、自らの進路を考えながら学習を進めることを特徴としており、生徒の多様な進路希望に対応できる高校教育の仕組みとして役割を果たしている。市立高校においては、西陵高校に「アカデミー」「健康スポーツ」「ふくし」「子ども」「経営ビジネス」「国際ビジネス」「情報ビジネス」の７系列を設置し、生徒が自らの興味・関心や進路希望に応じて学習内容を選択できる環境を整えている。

また、近年の教育改革で重視されている主体的な学び、探究学習、キャリア教育、文理横断的な学習などは、総合学科が従来から取り組んできた教育理念と共通する部分が多く、総合学科の役割については改めて注目すべき点がある。

一方で、選択履修の難しさ、専門性の確保、教員体制などの課題も存在し、総合学科の利点を生かしながら、今後の社会状況や生徒のニーズに対応した新たな形を模索していくことが必要である。

総合学科の課題

- ●生徒の進路意識が十分でない場合は科目選択が難しい。
- ●普通科ほど進学に特化せず専門学科ほど専門性も深めにくい点があり、特色をどう打ち出すか難しい。
- ●多様な科目開設に伴う教員確保や教育課程運営の負担。

☑ 改革の方向性

今後の総合学科は、社会の変化や生徒の多様な進路希望に対応できるよう、教育内容や系列を柔軟に見直し、これからの社会で必要とされる知識や技能、資質を身に付けられる学びを充実させることが求められる。

また、地域の企業や大学との連携を強化し、探究活動や体験的な学習の機会を増やすことで、生徒が実社会とのつながりを意識しながら主体的に学べる環境を整える必要がある。さらに、地域産業や地域課題を踏まえた特色ある系列を設置することで、生徒の多様なニーズに応えるとともに、地域社会の発展に貢献できる人材の育成につなげることが期待される。

想定される取り組み

〇生徒の進路志向、市の重点施策等に応じた新たな系列の設置

〇地域や企業等と連携した実践的な学びの強化

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤総合学科は、地域の子ども、高齢者、生活者と関わりながら、生徒が自分の将来像を徐々に定めていく学校として位置付けられる。地域連携や協働の中で、専門性と学校教育としての教育性を組み合わせていく発想も重要。

➤西陵高校の地域連携の取組は地域からも良いイメージを持たれており、大きく方向転換するのではなく、地域との協働をさらに発展させる方向が望ましい。

（４）定時制

☑ 現状・課題

定時制高校は、もともと働きながら学ぶ勤労青少年のために設置されたが、現在は不登校経験者、特別な支援を必要とする生徒、日本語指導を必要とする外国ルーツの生徒、家庭環境の問題や経済的困難を抱える生徒など、多様な背景を持つ子どもの学びの場となっている。また、「学び直し」や「再チャレンジ」を支える教育機関としての役割が高まっている。市立高校では、中央高校に昼間定時制と夜間定時制、工業高校に夜間定時制を設置しているが、同様に生徒の多様化が進んでいる。

全国的には、少子化や通信制高校への進学者増加などを背景に、定時制課程の生徒数や学校数は減少傾向にある。しかし、定時制課程は多様な背景を持つ若者を包摂し、教育機会を保障する重要な役割を担っており、「誰一人取り残さない高校教育」を実現する上で欠かせないものとなっている。

今後は、多様な生徒を包摂する教育のセーフティネットとしての機能をさらに高めるとともに、生徒一人一人の学習状況や生活実態に応じた柔軟な学びと支援を実現する仕組みづくりが重要な課題である。

定時制の課題

●多様化するニーズやライフスタイルへの対応
●生徒の多様な背景に対応した支援体制の充実

☑ 改革の方向性

定時制については、多様な背景を持つ生徒の学びを保障し、「学びを途絶えさせない」ための重要な教育資源として今後も重要な役割を担っていくことが求められる。三部制の導入や学校間連携による単位互換など、学び方や学習機会の選択肢を広げる仕組みを検討し、セーフティネットの役割のみならず、生徒が自らのペースで学ぶことができ、スポーツや起業等により学校外で活躍する生徒や多様なライフスタイルを持つ生徒も支えられる仕組みへ発展することが期待される。

想定される取り組み

〇三部制への移行
〇学校間連携や通信制等の活用による履修方法の拡充

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤定時制は、「多様な生徒を包摂する」という観点から極めて重要な存在であり、不登校傾向などにより毎日学校へ通うことが難しい生徒にとって、重要な学びの場となっている。

➤三部制への移行は、生徒の選択肢を広げ、より学びやすい環境づくりに有効である。

➤愛知県で導入されているフレキシブルハイスクールのような柔軟な仕組みも参考にしながら、市立学校としてどのような対応ができるか検討する必要がある。

➤定時制は、通学が困難な生徒だけでなく、スポーツ、起業、研究など学校外で活躍する生徒の学びを支える場としても位置付けられる。多様な学び方やライフスタイルを支える教育環境として、今後さらに重要性が高まると考えられる。

6　学びを支えるしくみ

市立高校では、今後、普通科、専門学科、総合学科、定時制課程それぞれの特色や課題を踏まえた改革を進めていく必要があるが、学科ごとの教育内容の充実だけでなく、市立高校全体を視野に入れた制度や仕組みを構築し、生徒が自らの目標や状況に応じて柔軟に学びを選択できる環境を整備することが重要である。

検討にあたっては、「多様な学びの保障」や「教育機会の拡充」の視点を基本とし、既存の学校・学科の枠組みや制度にとらわれず、多様な教育課程や学習形態を導入することで、生徒の学習機会や選択肢の拡充を図ることが必要である。

想定される取り組み

〇中高一貫校の検討
〇通信制の導入、活用
〇学びの多様化学校（多様化コース）
〇学校の枠を越えた学びの強化

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤学びを途絶えさせないという観点は、公立高校として非常に重要。
➤全日制入学後に状況が変わった生徒にも、学びを途絶えさせず卒業までつなぐ道筋を多く用意することが重要。
➤様々な背景を持つ子どもの進路先として、公立の通信制は意義がある。
➤通信制は、通学困難な生徒だけでなく、学校外でも活躍する生徒の学びを支える環境としても位置付けられる。
➤学校数の多い名古屋市では、１校に多機能を持たせるだけでなく、学校同士が連携し、他校や通信制で取得した単位も活用しながら卒業できる仕組みが考えられる。
➤名古屋市の規模では、科学や数学など特定分野に突出した才能を持つ子どもが潜在的に一定数いると考えられ、多様な学びの中で視野に入れる必要がある。

懇談会における委員の発言内容（抜粋）　（中高一貫校について）

➤中高一貫校は多様な学びの選択肢の一つだが、受験の低年齢化は大きな課題であり、市立高校として設置する必要性や学校像は慎重に検討すべきである。

➤不登校傾向の生徒や日本語指導が必要な生徒にとって、受験の障壁を下げながら学びを継続する仕組みとして検討の余地がある。

➤中高一貫校は、6 年間という長期で子どもを見てもらえる点で保護者にとって魅力的だが、理念や枠組みが明確でないと、学力重視・受験競争型の学校というイメージになりやすいため、明確な理念設計が必要。

➤大切なのは入口だけでなく、入った後にどのような学びを提供するかである。

➤中高一貫校については、ゆとりをもって学べる学校、子どもの成長に寄り添う学校が望ましい。

➤新設の是非だけにとらわれず、幼小中高で「学びのコンパス」を共有し、自ら学びをデザインする力を伸ばすことは既存の枠組みでも進められる。

7 持続・発展のための体制づくり

少子化の進行や施設の老朽化、限られた財源・人的資源への対応など、市立高校を取り巻く環境は今後さらに厳しさを増すことが見込まれる。そのような中で、市立高校の持続的な発展を実現していくためには、教育内容の充実とあわせて、将来的な学校再編や学科再編等も視野に入れた改革を検討し、持続可能な体制を構築していくことが必要である。

再編の検討にあたっては、単に学校数を減らすことや効率化を目的とするのではなく、「新しい学校を創る」という前向きな発想を基本理念として進めるべきである。学校再編や学科再編は、これまで各校が培ってきた特色や伝統、教育資源を継承・発展させながら、未来を担う子どもたちのために、より魅力的な学びの場を創造する機会として捉える必要がある。

あわせて、市立高校全体を一体的な教育資源として捉え、人材や特色ある教育活動の共有、学校間連携や単位互換の充実などを進めることで、生徒の学びの選択肢の拡大と教育力の向上を図ることが求められる。こうした日常的な学校間連携の積み重ねは、将来の学びの環境や新しい学校づくりの基盤ともなる。

今後の検討では、人口減少や財政状況などの現実的な課題について関係者に丁寧に説明するとともに、施設、学び、人材、ネットワークなどの「知と機能の総和」を高める視点を重視し、市立高校全体の魅力向上につながる改革を推進することが望まれる。改革と持続可能な運営体制づくりを一体的に進めながら、継続性・発展性のある市立高校の将来像を描いていくことを期待する。

懇談会における委員の発言内容（抜粋）

➤施設の老朽化や人口減少への対応は必要であり、再編の議論は避けられない。
➤再編は「学校をなくす」のではなく、「新しい学校をつくる」という前向きな発想で進めるべき。
➤学校再編には不安が目立ちがちだが、夢や魅力を示すことが重要。
➤再編は、それぞれの学校の特色や学びを引き継ぎながら、未来の子どもたちのためにより良い新しい学校をつくる取り組みとして進めることが重要。
➤再編で校数は減っても「知や機能の総和を高める」という発想で考えるべき。
➤新しい施設・立地・名称など、前向きな再編の要素をしっかりと検討することが重要。
➤学校統合ありきではなく、更なる学びの発展や学校間連携の進化という視点が必要。
➤14 校の学校間の教員人材を連携し、各校の特色を別の学校でも展開できるようになるとよい。
➤各校の特色ある取り組み・魅力が保護者や生徒へ十分に伝わっておらず、具体的・効果的に発信する必要がある

参 考　　魅力ある市立高等学校づくり懇談会委員名簿

氏名 （敬称略）	所属
久野　弘幸	中京大学教養教育研究院　教授
柴田　好章	名古屋大学大学院教育発達科学研究科　教授
伊藤　恭彦	名古屋市立大学　理事・副学長
加納　澄江	愛知県教育委員会　教育部長
平井　由紀子	株式会社セルフウイング　代表取締役社長 博士（早期起業家教育） （文部科学省　アントレプレナーシップ推進大使）
九鬼　綾子	ミックインターナショナル株式会社　代表取締役 （中部経済同友会 教育を考え行動する委員会 委員長）
青木　総平	名古屋市立小中学校ＰＴＡ協議会　会長
林　深雪	名古屋市立高等学校ＰＴＡ協議会　会長
加賀　幸一	名古屋市立東桜小学校　校長
久木田　隆宏	名古屋市立菊里高等学校　校長
森　義裕	名古屋市立植田北小学校　教諭
加藤　司	名古屋市立工芸高等学校　教諭

参 考　　魅力ある市立高等学校づくり懇談会開催実績

年月日	議題
第１回 令和 8 年 7 月 22 日	・市立高校の役割 ・市立高校の目指す教育 ・持続可能な体制づくり
第２回 令和 8 年 9 月 7 日	・第 1 回懇談会意見まとめ ・市立高校改革の方向性 普通科改革 専門学科改革 総合学科改革 定時制改革 学びを支えるしくみ
第３回 令和 8 年 10 月 13 日	・懇談会議論のまとめ

令和８年度　魅力ある市立高等学校づくり懇談会
意見のまとめ（案）【概要版】

１　懇談会の概要

名古屋市立高校のあり方について多角的な視点から議論を行い、令和８年度中の策定を予定している「魅力ある市立高等学校づくり推進基本計画」第３次計画の検討の参考とすることを目的として設置

委　　員　有識者・学校関係者・保護者代表等により構成
開催期間　令和８年７月～10月にかけて３回開催

２　市立高校が目指すもの

市立高校の役割

生徒の多様な進路や学習ニーズに応える
- ○多様な学びのスタイルの提供
- ○教育の質・機会の確保

名古屋市の発展を支える人材育成の基盤
- ○都市の発展、市の重要施策の実現
- ○名古屋で活躍する人材、名古屋に関わり続ける人材の育成

生徒育成の基本理念

ナゴヤ学びのコンパス
- ○自分に合ったペースや方法で学ぶ
- ○多様な人と学び合う
- ○夢中で探究する

育成したい資質
- ○自らの学びと進路を主体的に探究し切り開く力
- ○多様な他者とともに学び、協働して課題を解決する力
- ○未来を創造し、イノベーションを起こせる力
- ○地域・社会とのつながりを大切にし、貢献する力

３　改革のビジョン

Vision1　都市の発展を実現する「戦略的な教育拠点」
- ➤都市の発展（国際化・デジタル化・先端技術など）の基盤となる教育
- ➤名古屋を拠点に世界へ飛躍する人材の育成

Vision2　名古屋の産業・文化を支える「人材育成拠点」
- ➤地域経済・産業と教育の接続
- ➤市だからできる地域密着型の連携
- ➤社会と直結する実践的・探究的な学び

Vision3　多様な生徒を包摂する「都市型教育の中核」
- ➤学力、経済状況、国籍、進路志向など、多様な背景への対応
- ➤単なる受け皿ではなく、多様性を価値に変える教育拠点

4 各学科の方向性

普通科

各学校の特色化や役割の明確化

➤生徒の多様なニーズへの対応、個に応じた学びの実現

普通科の利点（多様な進路につながる基本的な学びの保障）も確保

想定される取組
- 単位制の導入
- 新学科への改編・コースの設定
- 探究的な学びの拡充

専門学科

産学官連携の強化、探究的な学びの充実

➤実社会との接点の強化による専門性＋創造性の育成

社会ニーズに応じた内容への見直し

想定される取組
- 高大連携の強化、企業等とのパートナーシップの強化
- 現代的ニーズに基づく学科への再構築

総合学科

社会の変化や生徒の多様な進路希望への対応した主体的な学びの環境づくり

➤生徒の多様なニーズへの対応、個に応じた学びの実現

想定される取組
- 生徒の進路志向、市の重点施策等に応じた新たな系列の設置
- 地域や企業等と連携した実践的な学びの強化

定時制

学び方や学習機会の選択肢を広げる仕組みの検討

➤多様な背景を持つ生徒の学びの保障、多様なライフスタイルを持つ生徒が自らのペースで学ぶことができる仕組みへの発展

想定される取組
- 三部制への移行
- 学校間連携や通信制等の活用による履修方法の拡充

5 学びを支えるしくみ

視点「多様な学びの保障」「教育機会の拡充」

既存の学校・学科の枠組みや制度にとらわれず、多様な教育課程や学習形態を導入

想定される取組
- 中高一貫校の検討
- 通信制の導入、活用
- 学びの多様化学校（コース）
- 学校の枠を越えた学びの強化

6 持続・発展のための体制づくり

市立高校の持続的な発展の実現のためには、教育内容の充実とあわせて、将来的な学校再編や学科再編等も視野に入れた改革を検討し、持続可能な体制を構築していくことが必要

「新しい学校を創る」前向きな発想	「知と機能の総和」を高める視点
市立高校全体を一体的な教育資源と捉える視点	これまでの伝統・特色等の継承・発展